

倉庫をめぐる差役について

——明清時代における徭役と行政の関係（上）——

伍 躍

はじめに

一、倉庫の設置と主管官吏

- 1) 地方における倉と庫
- 2) 地方倉庫を管理する官と吏
- 3) 架閣庫と耳房庫 (以上本号)

二、斗級と庫子の徴発

- 1) 斗級と庫子の配置
- 2) 斗級と庫子の徴発標準
- 3) 明代中期以後の状況

三、斗級と庫子の職掌

- 1) 錢糧財物の収納と放出
- 2) 錢糧財物の保管 (以上第12号)

四、斗級と庫子の負担

- 1) 定額外の要求
- 2) 定額外の要求を生ずる原因

おわりに (以上第13号)

はじめに

戦後半世紀にわたり、中国明代（1368-1644）と清代（1616-1911）の徭役制度史の研究は、中国や日本の学者たちに重視され、たくさんの研究論文が発表されてきた。それにもとづいて、六十年代より、専著も続々と出版されている⁽¹⁾。今、それらの研究成果に着目してみると、もう一つの注目すべき現象に気がつく。つまり、これまでの研究では、学者の関心が、ほとんど徭役の編審方法と輪當制度とに集中していることである。一方、徭役制度の目的、あるいは徭役制度と行政制度の関係についての研究は、まだ不充分であると思われる。明清時代の徭役制度は、言うまでもなく当時の政治制度に付属しているものである。当時の政治制度のもとに、民衆は国家の法律と政府の政策にしたがって、組織的に各レベルの政府と官僚に錢糧物資、労働力を提供し、はては具体的な行政事務を担当していた。このため、徭役編審方法を研究するとともに、よりいっそう徭役と行政制度との

(1) 研究成果をすべて列挙するのは不可能であろう。主な参考文献を以下に挙げるに止めよう。山根幸夫『明代徭役制度の展開』（東京、東京女子大学学会、1966年）、川勝守『中国封建国家の支配構造』（東京、東京大学出版会、1980年）、濱島敦俊『明代江南農村社会の研究』（東京、東京大学出版会、1982年）、岩見宏

『明代徭役制度の研究』（京都、同朋舎、1986年）、唐文基『明代賦役制度史』（北京、中国社会科学出版社、1991年）。日本の研究状況については、谷口規矩雄『日本における明代徭役制度の研究』（『中国史学』、3巻（1993年10月）、181-200ページ）を参考のこと。

関係に注目しなければならない。そうすれば、徭役制度の研究を深めるだけでなく、当時の行政制度及び民衆と国家の関係についても、より全面的に認識できると思われる。以下では、錢糧に関わる倉庫諸役を例として、徭役制度と地方行政の関係を説明してみることにしよう。

錢糧は、前近代社会における中国地方政府の行政事務のなかで、最も重要な位置を占めている。明代には、「知県は全県の政務を管理する。……賦は金穀、布帛及び諸貨物があり、役は力役、雇役、借債不時の征があり、皆天時の休咎、地利豊耗、人力貧富を見て、調剤して平均に割り当てる。歳欠であれば、ただちに府あるいは省に賦役の減免を請う。凡そ養老、祀神、貢士、讀法、善良の褒誉、窮乏の救済、保甲の稽查、治安の維持、獄訟の処理などは、皆職に力を尽くし勤慎にする。もし山と海からの物産が国の財政を助ければ、則ち籍にしたがって、貢ぎ物を提供する」とある⁽²⁾。清代も同じであった。知県の職掌は、「全県の政令を管理する。賦役を平均し、治安と訟訟を聴し、教化を興し、風俗を激励する。凡そ養老、祀神、貢士、讀法、皆職に力を尽くし勤慎にする」とある⁽³⁾。これに見られるように、明清時代では、賦税と徭役は、知県の重要な任務と認識されていた。賦

税の徴収と保管においては、倉庫は不可欠な施設である。当時、中央と地方とともに、さまざまな倉庫を設立し、錢糧財物を保管していた。官僚が交代する時に、倉庫の点検は交代の手続きのなかで最も重要なものの一つである。「着任の後、あらゆる城池倉庫は、皆職掌に関わるものである。ともに宜しく次第に詳しく点検を加える。庫銀倉穀については、なお交盤の重務に属し、潦草過套にすべからずにして、以て自ら賠累する」とある⁽⁴⁾。明代の御史は出巡する時に、倉庫を検査する職掌も負っていた。「倉庫房屋は、本府の提調官に仰せて常に點視する。もし損壞すれば、ただちに修理させる。方法を講じて斗級人等の違法行為を防止する。なお見在錢糧等物をもって、上年舊管、今歳收除と実在備細の數目を分けて、帳簿を作り、官吏の結罪文状と一緒に上報する」とある⁽⁵⁾。このような記事は明清時代の官箴書のなかによく見られる。このほか、中央と地方においては、行政文書檔案を保管するためのものも遍く設置されている⁽⁶⁾。そのなかで最も有名なものは、明代の南京における黄冊庫である。今まで保存されている北京順天府檔案、四川巴県檔案、臺灣淡新檔案、江蘇太湖廳檔案の最初の収蔵地は当時各地方政府の檔案庫であったと思われる。

(2)『明史』(北京、中華書局、1974年)、卷75、職官志4、1850ページ

「知縣掌一縣之政。凡賦役，歲會實征，十年造黃冊，以丁產為差。賦有金穀、布帛及諸貨物之賦，役有力役、雇役、借債不時之征，皆視天時休咎，地利豊耗，人力貧富，調劑而均節之。歲歉則請於府若省蠲減之。凡養老、祀神、貢士、讀法、表善良、恤窮乏、稽保甲、嚴稽捕、聽獄訟，皆躬親厥職而勤理焉。若山海澤藪之產足以資國用者，則按籍而致貢。」

(3)『清朝通典』(臺北、新興書局、1964年)、卷34、2211ページ

「掌一縣之政令。平賦役，聽治訟，興教化，勵風俗。凡養老、祀神、貢士、讀法，皆躬親厥職而勤理之。」

(4)黄六鴻『福惠全書』(東京、汲古書院、1973年、嘉永

3年(1850)刻本影印)、卷3、蒞任部、親查閱、9aページ

「到任之後，一應城池倉庫，皆職掌所關，俱宜次第細加查閱。至於庫銀倉穀，猶屬交盤重務，非可潦草過套，以自賠累也。」

(5)『諸司職掌』(玄覽堂叢書本)、都察院、出巡、11b-12aページ

「倉庫房屋仰本府提調官常川點視，若有損壞，即便修理，即設法關防斗級人等作弊。仍將見在錢糧等物分豁上年舊管、今歳收除實在備細數目，同官吏結罪文状繳報。」

(6)公文書の保管について、谷井陽子「清代則例省例考」(『東方学報』(京都)、67冊(1995年)、139-142ページ)を参照のこと。

これまで預備倉等についての研究はあるが⁽⁷⁾、明清時代における倉庫制度及び地方行政に関わる倉庫の管理制度については、これまでのところ全面的に論述したものはまだ見あたらないようである。本稿は、明清時代の倉庫及びその管理制度を全面的に研究するのではなく、以下の問題に限定して説明してみようとするものである。地方倉庫で働く差役夫(斗級と庫子)は、どの仕事をしていたのか。則ち、彼らは何の責任を持っていたのか。ほかの差役夫と比べれば、倉庫関係の差役夫はどんな特徴を持っていたのか。彼らは、地方行政制度との間で、どのようにつながっていたのか。こうした問題を説明するために、まず明清時代の倉庫と倉庫管理体制を簡単に紹介する必要がある。

明清時代の倉庫制度という問題はかなり複雑である。論述の分散化を避けるために、以下では中央と軍事性の倉庫、儒学と民間互助の倉庫を除外し、主に地方倉庫の管理、地方倉庫と地方行政の関係を中心として、論述を展開していきたい。一方、清代の地方行政制度は基本的に明代の制度を受け入れたものであるので、論述の中心は明代に置くこととしたい。

一、倉庫の設置と主管官吏

1) 地方における倉と庫

明清時代には、倉は主に糧食の保存をし、庫は主に銭と物資の保管をするのが通常であった。倉庫の運営については政府との関係が非常に密接なものであったと考えられる。明清兩代の支配者は以前の歴代王朝と同じように、全国性の倉儲システムを作っていた。各倉庫は相対的に独立し、別々に一定の行政機構に附屬していた。明代においては、「国家倉庾の設は、天下に遍く。兩京直隸並に各布政司府州県、各都司衛所及び各王府にはみんな倉が有る」とされている⁽⁸⁾。正徳(1506-1521)と萬曆年間(1573-1619)に二回編纂された『大明會典』の記録によれば、正徳初年には全国倉の数は849カ所で、萬曆初年には1107カ所にのぼっている⁽⁹⁾。しかし、二つの『大明會典』のなかに、庫についての詳細な記載がない。明代、中央と皇帝に属する太倉庫、内府庫のほかにも、「その在外の諸布政司、都司、直省府州県衛所に皆庫があり、以て金銀、錢鈔、絲帛、贓罰諸物を收藏する」であった⁽¹⁰⁾。清代の情況は明代とほぼ同じであろう。北京に京倉が設けられ、各省及び各府

(7) 梁方仲『明代的預備倉』(『益世報(天津)』、史学50、1937、3、21)、星斌夫『明代における臨清德州二倉の役割』(『歴史学研究』、13巻10号、1943年、1-33ページ)、同氏『明代的預備倉と社倉』(『東洋史研究』、18巻2号、1959年、1-21ページ)、森正夫『十八～二〇世紀の江西省農村における社倉・義倉についての一検討』(『東洋史研究』、33巻4号、1975年、60-98ページ)、松田吉郎『清代後期広州府の倉庫と善堂』(『東洋学報』、69巻1～2号、1988年、27-58ページ)、松浦章『明清時代北京の倉庫』(『肝陵』、20号、1989年)。このほか、星斌夫『明代漕運の研究』(東京、日本学術振興会、1963年)、同氏『中国社会福祉政策史の研究』(東京、国書刊行会、1985年)を参照のこと。

(8) 『(正徳)大明會典』(東京、汲古書院、1989年、明

正徳間内府刻本影印)、巻39、戸部24、倉庾2、内外倉庾1、1aページ

「國家倉庾之設、遍於天下。兩京直隸並各布政司府州縣、各都司衛所及各王府皆有倉。」

(9) 『(正徳)大明會典』、巻39、戸部24、倉庾2、内外倉庾1、1a-25bページ；巻40、戸部25、倉庾2、内外倉庾2、1a-30bページ

『(萬曆)大明會典』(明萬曆間内府刻本)、巻21、戸部8、倉庾1、1a-26aページ；巻22、戸部9、倉庾2、1a-28bページ

(10) 『明史』(北京、中華書局、1974年)、巻79、食貨志3、1928ページ

「其在外諸布政司、都司、直省府州縣衛所、皆有庫、以貯金銀、錢鈔、絲帛、贓罰諸物。」

州県に常平倉或いは預備倉が設けられている。これらの他にいわゆる社倉、義倉、旗倉、營倉などもあった。庫については、中央に属するものがある一方で、地方にも布政使司庫（藩庫）、按察司庫（臬庫）、河道庫、兵備道庫などや、各府州県庫が設立されていた⁽¹¹⁾。康熙年間（1662-1722）、中央及び各地における倉の総額は1158カ所で、庫の総額は805カ所である⁽¹²⁾。

ところで、以上に列挙された数字は、当時全国にあったあらゆる倉と庫の数ではない。例えば、明代、成化年間（1465-1487）には、呉江県に架閣庫、西庫、義役倉、存留倉、濟農倉が設立されたが、これらは『大明會典』のなかに記載されていない⁽¹³⁾。このあと、義役倉と存留倉が私宅に変わった。そして、嘉靖年間（1522-1566）においては、架閣庫、西庫、濟農倉だけが残されていた⁽¹⁴⁾。

海寧県の場合には、嘉靖年間に架閣庫、耳房庫、軍器庫、盈積倉（永平倉）、便民倉が設けられていた。しかし、これらのなかでは、ただ永平倉が『大明會典』に記載されているだけである⁽¹⁵⁾。

清代の情况も大体同じである。例えば、康熙

年間、嘉定県に鑾駕庫、架閣庫、軍器火藥庫、濟農倉が設立されていたが、『（康熙）大清會典』には架閣庫しか記載されていない⁽¹⁶⁾。

2) 地方倉庫を管理する官と吏

明清時代の地方官僚制度により、地方衙門のなかには倉大使、庫大使のポストが設置されている。明代、「倉大使一人（府には従九品で、州県には未入流である）、副使一人、庫大使一人（州県設）が置かれる」とある⁽¹⁷⁾。しかし、明代の倉大使に対し、次のことに注意すべきと思われる。

1. 府レベルの衙門には、ほとんど倉大使が置かれている。萬曆年間、杭州府における廣豊倉、廣積倉にそれぞれ大使一人、副使一人が配置されていた⁽¹⁸⁾。松江府の軍儲北倉にも、大使一人、副使一人が配置されていた⁽¹⁹⁾。『（弘治）徽州府志』のなかには、次のように詳しく記載されている。「永豊倉大使趙文は湖廣辰州衛軍籍で、浙江嘉興人である。監生より授任し、弘治十一年（1498）八月十七日に到任する。今、守支する。劉啓は四川内江人である。承差より授任し、弘治十二年（1499）八月二十四日に到

(11)『清史稿』（北京、中華書局、1976年）、卷121、食貨志2、3553-3563ページ

(12)『（康熙）大清會典』（清康熙年間内府刻本）、卷28、戸部12、倉庾1、1a-27bページ；卷29、戸部13、倉庾2、1a-35aページ；卷30、戸部14、庫藏1、1a-30bページ

(13)『（弘治）呉江志』（明弘治元年（1488）刻本）、卷3、治所、4bページ；卷4、官宇、9b-10bページ

(14)『（嘉靖）呉江縣志』（明嘉靖40年（1561）刻本）、卷5、建置志、8a-28aページ

「義役倉。在北門内、永定橋西。建置無考。成化六年（1470）尚貯米一萬三千八十石、銀一萬二百六兩。今廢為私第。」

「存留倉。在北門内。建置無考。成化十九年（1483）尚貯米七千一百三十八石有奇。今廢為民居。」

「濟農倉。在北門内。宣德五年（1430）巡撫侍郎周忱建。廩屋五連、總七十二楹。正統十三年（1448）又建官廳八楹、門井籌房皆備。景泰中大饑、盡發所積以賑民。

其後莫有輸者、倉隨以廢。弘治五年（1492）知縣金洪即其中一區建察院。十一年（1498）知縣郭郭即察院之東西重建焉。廩屋總八十楹、官廳門垣皆備。」

(15)『（嘉靖）海寧縣志』（清光緒24年（1898）刻本）、卷3、倉庫、2a-5aページ

(16)『（康熙）嘉定縣志』（清康熙12年（1673）刻本）、卷2、公署、5a-6bページ

『（康熙）大清會典』、卷30、戸部14、庫藏1、8aページ

(17)『明史』、卷75、職官志4、1852ページ

「倉。大使一人、（府）從九品、州縣未入流、副使一人、庫大使一人。（州縣設）。」

(18)『（萬曆）杭州府志』（明萬曆7年（1579）刻本）、卷17、古今守令表、38a-39bページ

(19)『（崇禎）松江府志』（明崇禎3年（1630）刻本）、卷27、守令題名、55aページ。

任する。在任中である」と⁽²⁰⁾。

2. 倉大使は、必ずしもあらゆる州県に配置されるわけではない。倉大使が配置される州県は、恐らく『大明會典』に倉の記載がある州県に限られたと思われる。例えば、上述の呉江県には倉の設置があったにもかかわらず、『大明會典』のなかに関係記載がない、一方、倉大使も配置されていなかった。逆に、海寧県における盈積倉（永平倉）は『大明會典』に記載されている。したがって、杭州府に管轄される九県のなかにはほとんど倉が設置されていたわけであるが、海寧県だけに倉大使一人が配置されていた。地方志にも六名の永平倉大使が記録されている⁽²¹⁾。

「李繼忠は徐州人である。吏員より、嘉靖三十年（1551）任命される。

趙楷は沛県人である。吏員より、嘉靖三十一年（1552）任命される。

鍾全は南康人である。吏員より、嘉靖三十二年（1553）任命される。

鄒汝汶は蒙城人である。吏員より、嘉靖三十（三）年（1554）任命される。

呉富は綿州人。吏員より、嘉靖三十四年（1555）任命される。

王榮は定遠人である。吏員より、嘉靖三十五年（1556）任命される」。

ここに見られるように、倉大使の出身はほとんど胥吏である。かれらの任期は通常一年であり、

明代の規定によれば、倉大使という職は、胥吏の出身入仕ルートの一つであった⁽²²⁾。

『明史・職官志』及び『大明會典』の記載によれば、庫大使は州県レベルの衙門に配置されるべきものと考えられるが、現在のところ、州県レベルの衙門に庫大使が配置されていたとする史料はまだ見つかっていない。ところで、史料のなかに、府レベル衙門に庫大使というポストを設置していた事例がある。例えば、松江府の永豊庫には庫大使一人が配置されていた⁽²³⁾。

実際に、庫大使と倉大使とともに、胥吏も明代地方倉庫の管理者である。明代の規定によれば、各布政司庫、各府庫、各府州県倉にそれぞれ攢典が配置される⁽²⁴⁾。倉大使、庫大使と比べれば、胥吏は倉庫の具体事務を運営していた。永樂年間（1403-1424）に頒布された『新官到任各房供報須知式様』のなかに次のような規定が設けられている。吏房司吏は、本地に倉が幾カ所、倉官が何名かを報告する。戸房司吏は、各倉に所蔵されている各種の糧米及び金銀錢鈔銅鐵錫綿麻絲の数を詳しく報告する⁽²⁵⁾。明代においては、官僚は交代する時に、在庫品の数をあらためる手続きをしなければならない。つまり「もし帳簿に銀の数が有るにもかかわらず、実際の銀両あるいは支銷卷案がなければ、到任以後にただちに責任のある吏書の贓を計って処罰する」とある⁽²⁶⁾。黄六鴻が挙げる「庫書」、「倉書」は倉庫事務を担当する胥吏と考えられ

(20) 『(弘治) 徽州府志』(明弘治15年(1502)刻本)、巻4、郡邑官屬、37a-bページ

「永豊倉大使趙文、湖廣辰州衛軍籍、浙江嘉興人。由監生授任、弘治十一年八月十七日到。今守支。劉啓、四川内江人、由承差授任。弘治十二年（1499）八月二十四日到。見任。」

(21) 『(嘉靖) 海寧縣志』、巻5、職官志、8b-9aページ

「李繼忠、徐州人、由吏員、嘉靖三十年（1551）任。趙楷、沛縣人、由吏員、嘉靖三十一年（1552）任。鍾全、南康人、由吏員、嘉靖三十二年（1553）任。

鄒汝汶、蒙城人、由吏員、嘉靖三十（三）年（1554）任。

呉富、綿州人、由吏員、嘉靖三十四年（1555）任。

王榮、定遠人、由吏員、嘉靖三十五年（1556）任。」

(22) 繆全吉『明代胥吏』（臺北、中國人事行政月刊社、1969年）、112ページ

(23) 『(崇禎) 松江府志』、巻27、守令題名、55aページ

(24) 『(正徳) 大明會典』、巻7、吏部6、官制5、吏、13a-14aページ

(25) 『(正徳) 大明會典』、巻11、吏部10、1a-36bページ

る⁽²⁷⁾。このため、地方に倉官が配置されなくても、胥吏は倉庫事務の実際責任者であった。明代嘉靖年間、海寧県には倉大使の下に撰典一人が配置されていた⁽²⁸⁾。倉大使の任期が一年だけであるということを含めて考えれば、胥吏の重要性はいっそう高いものを考えるべきであろう。

清代にも、倉大使の職は依然として存在している。『(康熙)永州府志』の記載によれば、祁陽県預備倉、東安県永豐倉、寧遠県廣積倉と預備倉にはそれぞれ倉大使一人と撰典一人が配置されていた⁽²⁹⁾。これは言うまでもなく、明代の制度から引き継いだものである。しかし、倉大使の配置は次第に減少し、清末に、府倉大使は、全国にただ四か所があっただけである(つまり直隸保定府廣盈倉、山西太原府大盈倉、潞安府永豐倉、朔平府常豐倉である)。県倉大使は、全国に直隸天津県北倉だけに配置されていた⁽³⁰⁾。胥吏と比べれば、恐らく、倉大使には実際の仕事がほとんどなかったようである。そのうえ、倉大使の下に実務を運営する撰典がある。こうしたことから、倉大使の職は次々と取り消されていた。このような変化は衙門内部の何らかの変化に関わっているだろう。明代、胥吏は衙門内部の日常行政事務を運営していた

が、清代以後、幕友は胥吏に替わって、行政事務の実際の運営者になった。逆に、明代の情況と比べれば、胥吏の地位は相対的に下がって、ある実務の管理者になった。こうして、倉大使を配置する必要もなくなっていったのであろう。

3) 架閣庫と耳房庫

上述の倉庫のほか、行政檔案などを収蔵する架閣庫も衙門内の重要な施設である。架閣庫の設置は、少なくとも宋代(960-1279)に遡ることができる。宋代中央衙門のなかに、帳籍文案を保管する「主管架閣庫」というポストが設けられており、担当者は、官僚候補者のなかに人気がある者から選ばれたのである⁽³¹⁾。地方衙門にもこれに対応する管理職が配置されていた。例えば、常州及び各県の架閣庫の管理者については、州は職官で、県は丞簿尉であり、それぞれの案牘を二年に一回検閲した⁽³²⁾。元代(1206-1368)には、鎮江路總管府に架閣庫が二つ設立され、「一つは高閑閣の東に、一つは儀門の西にある」。このほか、録事司と丹陽県にも架閣庫が設けられていた⁽³³⁾。

明清時代、中央と地方の各衙門には架閣庫あるいは類似するものも置かれ、各事務部門(たとえば県衙内にある六房)からの公文書を収蔵

\\ (26) 余自強『治譜』(明末刻本)、巻2、到任門、交盤清查、2a-3bページ

「若冊上有銀數、查無實在銀兩、或無支銷卷案者、到任後即將承行吏書計贓究治。」

(27) 黃六鴻『福惠全書』、巻3、蒞任部、親查閱、9a-11aページ

(28) 『(嘉靖)海寧縣志』、巻3、建置志、倉庫、4aページ

(29) 『(康熙)永州府志』(康熙9年(1670)刻本)、巻3、建置志、公署、9a-16aページ

(30) 『(光緒)大清會典』(北京、中華書局、1991年、清光緒25年(1899)石印本影印)、巻6、吏部、53ページ

(31) 『宋史』(北京、中華書局、1977年)、巻163、職官志3、3865ページ

「主管架閣庫：掌儲藏帳籍文案以備用。擇選人有時

望者為之。舊有管幹架閣庫官、宣和罷之。紹興十五年復置、吏、戸部各差一員、禮、兵部各差一員、刑、工部各差一員、以主管尚書某部架閣庫為名。」

(32) 『(成化)重修毘陵志』(明成化22年(1486)刻本)、巻6、官寺、14bページ

「州以職官、縣以丞簿尉掌焉。諸案牘二年一檢閱。」

(33) 『至順鎮江志』(北京、中華書局、1990年、清道光22年(1842)刻本影印)、巻13、公廨、13a-20aページ

鎮江路總管府の架閣庫：「一在高閑閣之東、一在儀門之西。」

録事司の架閣庫：「録事司在府治西。……直堂為屏、屏之外為臺門、門之西為架閣庫。」

丹陽縣の架閣庫：「縣治在縣城北。廳事後有堂二、……中為樓、以架閣文字。」

していた。明代、南直隸蘇州府呉江県の架閣庫は県衙内幕廳の西にあり、「歴年の黄冊及び一応卷宗文冊簿籍を保管した」⁽³⁴⁾。浙江杭州府海寧県の架閣庫は洪武初年に創立され、嘉靖十五年（1536）に立て直された。この架閣庫は県衙の正廳の東に置かれ、「全县の歴年の版籍を收藏した」⁽³⁵⁾。ある地方の官僚は、月末ごとに処理した文書を整理し、架閣庫に送り保管した⁽³⁶⁾。

架閣庫に收藏される文書は日常行政に対し、大きな役割を持っていた。例えば、萬曆の末、浙江布政司嘉興県に土地登記をめぐる紛争が起き、四百人ほどの当地住民は府庁に乱入し、官僚に暴行も加えた。萬曆四十五年（1617）、同県知県劉餘祐は、前任知県陸獻明が自ら封印した「三県要緊田糧冊一箱」を見つけ、そのなかに「別事のために取り上げる嘉善縣遷西舊冊一冊があり、この冊のなかに全县における田地山蕩、本県田（おそらく本県の県民に属する田地である）、外県田（おそらく外県の県民に属する田地である）、千戸所田の数目と総額が詳細に記載されて」おり、県はこれをもって紛争解決の證據としたのであった。このほか、同県は

庫銀の横領事件を調査するために、「嘉善庫冊」を調べて、結局「（嘉靖）二十七年（1548）に、呉旆は関田の名義で銀四十五兩二錢六分を受け取った」の記録を発見したのであった⁽³⁷⁾。ここに言う「庫冊」は、恐らく架閣庫に收藏された文書であると思われる。

地方官にとって、架閣庫の管理は注意しなければならないことであった。則ち「架閣庫に收藏されるすべての文冊の数目は、交代の時に必ず明白に改めるべし。帳面と合わざることを許さず。平日とくに気を使って保管する。庫房の櫥櫃を適時に修理する。錠と鍵をともに堅固にする。敢えていい加減にして冊籍を損失し、あるいは勝手に無関係の人に冊籍を見せれば、若干の刑罰にて処分する」とされた⁽³⁸⁾。一部の地方官は架閣庫の施設を嚴重に作っている。例えば、明代浙江布政司嘉興県には架閣庫と黄冊庫がそれぞれ三棟あったが、「鉄の柵門、高い壁と深い濠を作った。水と火は近づくことができない」⁽³⁹⁾。また南直隸徽州府の架閣庫の壁は、火事に備えるために全部煉瓦で作られたのであった⁽⁴⁰⁾。

明代においては、架閣庫の管理は胥吏によつ

(34)『弘治』呉江志』、卷3、治所、4bページ

「架閣庫。在幕廳之西。收貯週年黄冊及一應卷宗文冊簿籍。」

(35)『嘉靖』海寧縣志』、卷3、建置志、倉庫、5aページ

「一在縣廳東、名曰架閣庫。國朝洪武初建、嘉靖十五年（1536）重修。收藏概縣歷年版籍。」

(36)許堂『居官格言』（抄本）、公座、7ページ

「凡公座每日平明署事、該吏 公座簿自下而上呈押其簿。一月一扁、待月終封付架閣庫收照。」

(37)『崇禎』嘉興縣志』（明崇禎10年（1637）刻本）、卷9、食貨志、土田、41b-44b、50aページ

「嘉興府嘉善三縣為繳查田冊據報倡亂以明紀綱以決去就事。……劉知縣又檢得前任陸知縣親封藏記西耳庫三縣緊要田糧冊一箱、內有先為別事吊到嘉善縣遷西舊冊一本、內開總撤田地山蕩、本縣田、外縣田、千戸所田各若干、數目甚明。」

「福建道御史楊州□奏為出師未有報期情形不無可虞

謹撮持危定傾之略竊附於杞人憂天之義懇惟聖明慨賜採納以修內治以鎮人心事。……吊查嘉善庫冊、二十七年果有吳旆領銀四十五兩二錢為關田用、……。」

(38)余自強『治譜』（明末刻本）、卷2、到任門、架閣庫、23bページ

「架閣庫一應文冊、交代時須要數目明白、不許短少。平時務要用心收拾、庫房厨（櫥）櫃俱及時簡蓋修理、鎖鑰俱要堅固。敢有因循致損失冊籍並將冊籍與人私查者、責若干。」

(39)『崇禎』嘉興縣志』、卷2、建置志、公署、14a-15bページ

「銅以鐵葉門、崇墉深溝、水火所不能及。」

(40)『嘉靖』徽州府志』（明嘉靖45年（1566）刻本）、卷6、公署志、41a-bページ

「慶積庫。在儀門前之左。宋名宣資、元名永豐、本朝改今名。墻垣皆磚、以備火患。」

て行われていた。「国朝は古代官署の制度を斟酌し、文籍檔案を保存するために六部で架閣庫を設置し、管理者である典吏一人を配置する」とある⁽⁴¹⁾。各地方政府の架閣庫にも同じように、典吏一人が配置されていた。しかし、例外の情況は仍然として存在していた。例えば、蘇州府嘉定県の架閣庫には専任の典吏が配置されておらず、同県架閣庫の管理は「六房輪點」の方法で行われていた。つまり県の六房（府州県の官庁内に置かれる六つの行政事務を処理する部局である。それぞれ吏、戸、礼、兵、刑、工と呼ばれる）の胥吏が順番に管理するのである。清代に入っても、このような管理体制が、引き続き運営されていた⁽⁴²⁾。

明清時代の地方衙門のなかに、架閣庫と同じような重要な役割を持つものに耳房庫がある。耳房庫は鑾駕庫、内庫⁽⁴³⁾、庫藏房らとも称される⁽⁴⁴⁾。もともと耳房そのものは衙門の正庁（正面の広間）の東西両側に建てられる小さな建物であった。最初、耳房庫設置の目的は、「ただ贖罪のため納められる紙と金を管理するためであった」⁽⁴⁵⁾。明代南直隸吳江県に、西庫と呼ばれる倉庫が設けられていた。この倉庫は、「架閣庫の前において、およそ七棟がある。毎

年收貯されるものは糧銀三萬餘兩並びに商税、贓罰等項目の財物も萬兩を下まわらない」⁽⁴⁶⁾。同じように、「錢鈔庫」と呼ばれる浙江布政司杭州府海寧県の耳房庫は、洪武初年に創立され、嘉靖十五年（1538）に立て直され、贓罰等項目の銀兩を収蔵していた⁽⁴⁷⁾。

上述のように架閣庫と耳房庫はほとんど地方衙門内の正庁の両側に置かれているが、ところで架閣庫と耳房庫に収蔵されるものは、情況によって、互いに変更されるケースもあった。南直隸徽州府に錢帛を収蔵する慶積庫は、知府衙門の儀門（衙門の正門と正庁の間に建てられる門である）前の左に置かれ、正庁までかなり遠いので、錢糧の出納には不便であった。逆に、冊籍を収貯する架閣庫は、府衙正庁両側の耳房に置かれていた。そのため、冊籍は慶積庫に移貯され、もともとの架閣庫は錢帛の収貯に変わったのである。弘治十七年（1538）、知府何歆は更にもとの架閣庫のなかに東、西二つの大箆箆を設置し、それぞれに吏戸礼三房及び兵刑工三房に属する各項目軍需銀兩を入れる箱を収蔵した⁽⁴⁸⁾。要するに、このような変化は、日常行政の運営をどうすればいっそうよく、効率的に満足させられるかによって決まっていたのである。

(41) 『南京吏部志』巻20、轉引自繆全吉『明代胥吏』、47ページ

(42) 『(康熙)嘉定縣志』、巻10、職官志、2a-3bページ

(43) 『(崇禎)松江府志』、巻21、官署上、1a-18bページ

(44) 『(崇禎)嘉興縣志』、巻2、建置志、公署、14a-15bページ

(45) 『(萬曆)杭州府志』、巻31、征役、12bページ
「蓋初設耳房、惟俾司贓罰紙直。」

(46) 『(弘治)吳江志』、巻3、治所、4bページ

「在架閣庫前、凡七間。每歲收貯糧銀三萬餘兩并商稅贓罰等項財物、不下鉅萬。」

(47) 『(嘉靖)海寧縣志』、巻3、建置志、倉庫、5aページ
「嘉靖十五年重修、額設庫子一名、管收贓罰等項銀兩。」

(48) 『(嘉靖)徽州府志』、巻6、公署志、41a-bページ

「架閣庫。即府正廳之左右耳房、本貯籍冊。本府原有慶積庫、在府儀門外、收貯錢帛。進因本庫與正廳頗遠、出納不便、遂將慶積庫收貯籍冊、改架閣庫為錢帛藏。歲久就敝、且門鑰欠嚴緊。弘治十七年(1504)知府何歆仍舊貫而新之。中分兩大櫃、東貯吏戶禮、西貯兵刑工各項軍需銀匣。櫃匣各繫大鎖、與外門、鐵門通四層鎖鑰、處置至為完密、守者便之。」